



□コンセプト

街の歴史、市民生活の歴史を見守ってきた油津商店街のアーケードや建物の構造体を、「街の記憶」として「新世代の街のインフラストラクチャー」と捉え、その中に柔軟かつ持続可能な建築、及びランドスケープの可能性を提案します。

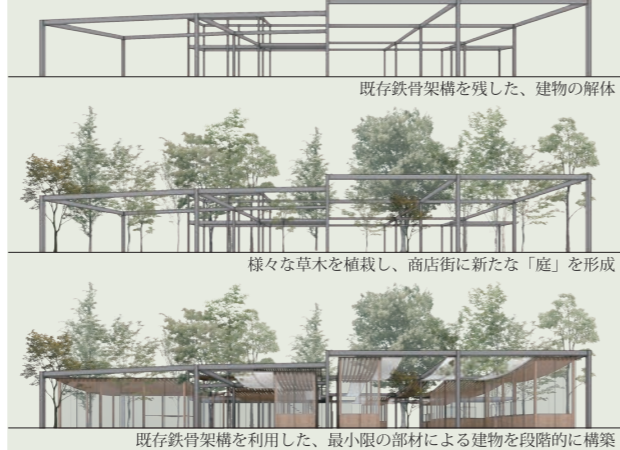
□油津地区と油津商店街



地方都市の商店街がかつて担っていた役割と機能は時代とともに変化し、新たな役割を備えた街のインフラとして、再び地域の中心に据えられることが期待されています。油津商店街は、油津駅と油津港、堀川公園や近辺に点在する観光資源とを繋ぐ重要な都市機能であり、同時に、地域の人々の生活の中心地です。市内における緑のネットワークの再構築を促し、周辺の各施設との繋がりをより強固にするために、アーケード商店街は「緑の拠点」として整備され、この「緑の拠点」は、従来の商店街に代わる新しい市街地空間として機能します。

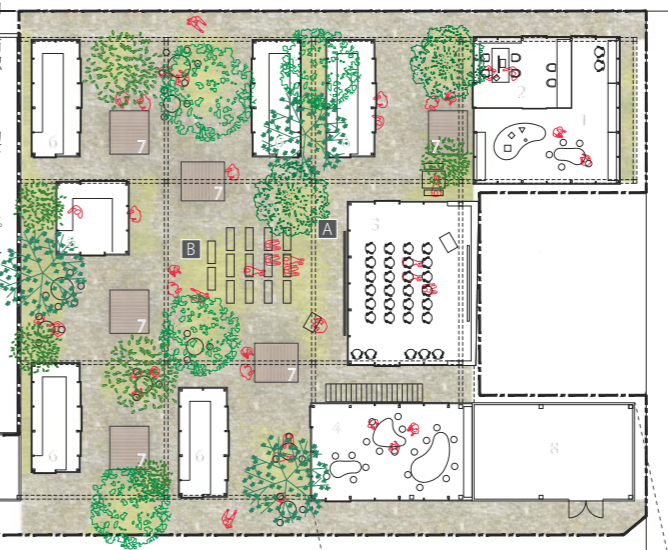
□「地」の建築

既存建物の鉄骨架構を、これまでの商店街の発展を担ってきた記憶として残すと共に、新たに構築するモールの設備インフラとして再利用します。空に開放された空間に、様々な草木を植栽し、従来の閉鎖的なアーケードの空間に、自然溢れる風通しの良い空間を生み出します。既存の躯体を利用した、最小限の部材で構成される建築群は、一体の建物とは異なり、必要に応じた段階的な建築計画、及び自由な配置計画が可能です。鉄骨材を積極的に利用した新しい工法の発明が期待され、様々な草木を植栽し、従来の閉鎖的なアーケードの空間に、自然溢れる風通しの良い空間を生み出します。既存の躯体を利用した、最小限の部材で



□平面図

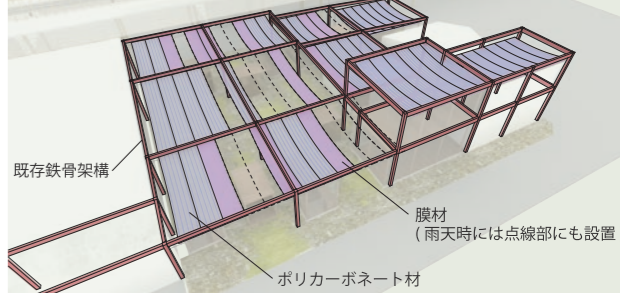
アーケード側、及び南西道路側の壁面を取り払い、計画敷地内外を流動的につなぎ、人々の自然な往来を促進します。また商業やイベント等の賑わいを視認できるように、敷地に点在する施設を透明な素材で覆います。さらにこの空間的な繋がりは、商店街でのイベント時にも周辺市街地と一体の街路空間としての利用を可能にします。建築は植栽や木々の間に配置され、同時に外部空間と緩やかにつながることで、中央の交流プラザをはじめ大小様々な半屋外空間が生まれます。



□一階平面図 縮尺：1/200

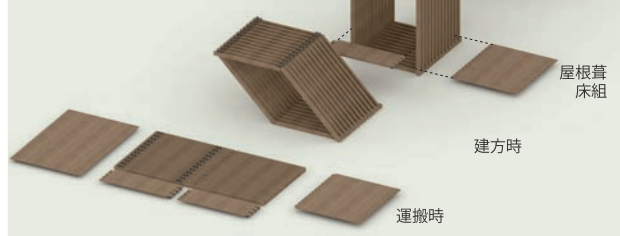
□吊り屋根

懸垂状に吊られた屋根は、既存の鉄骨架構の間に掛け渡す事により形成されます。永続的に利用する建物の吊り屋根には、主に屋外空間として使用する場には膜材の吊り屋根を掛けます。雨天時には膜材を張る場を拡張する事に



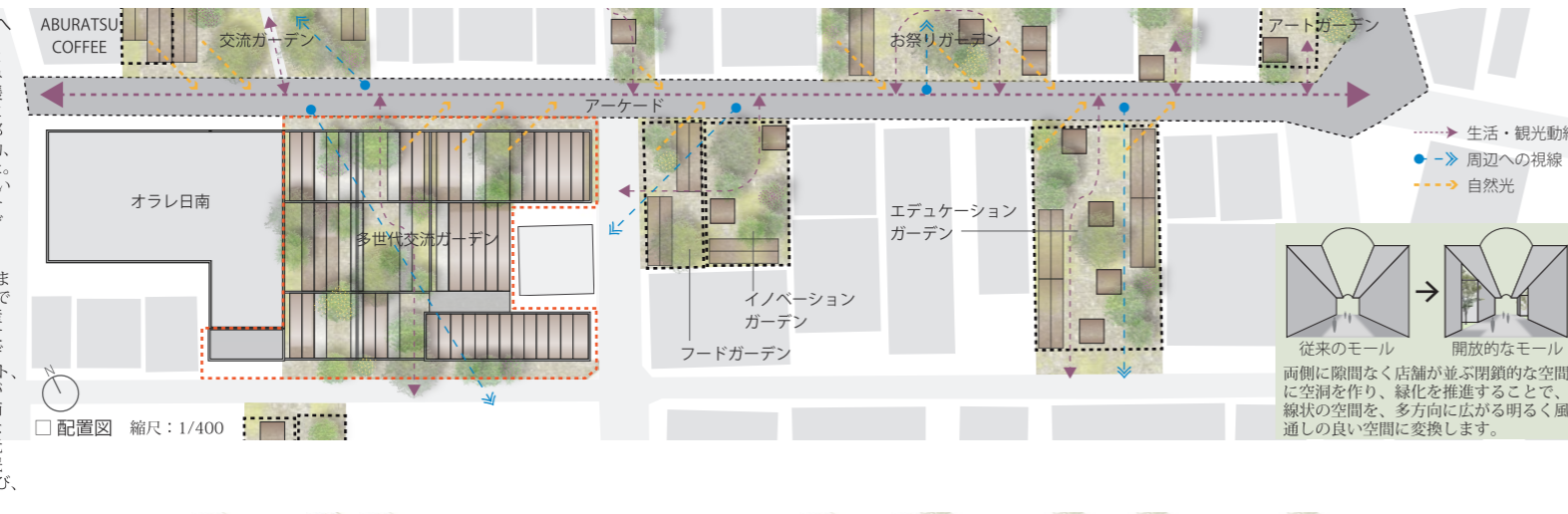
□鉄肥杉小屋

平板状に組んだルーバー材を、パンタグラフ式に持ち上げる事により形成される小屋は、間伐材や、端材等の小径材で構成する事ができます。また、簡単な構造のため、ワークショップ等、市民参加による作成が可能です。移動時には、平板状に再変形させ、省スペース化を図る事で、運搬、収納を容易にします。

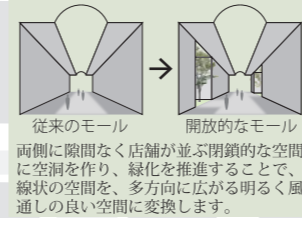


□「商店街」から「ガーデンモール」へ

閉じたシャッターを再び開くことを目標とした商店街の再興計画は、全国各地で試みられていますが、大きな資本や行政の支援をもってしても持続可能な再興の例を目にする機会は多くはありません。特に地方都市では人口が減少し、交通事情、消費行動、生活スタイル等は急速な変化を遂げました。こうした社会背景に対して、「商店街」という構造そのものが真に機能し得るのかを十分に考察せず、地域の再興を成し遂げるのは困難です。「そこにだけ有るモノ」を求めて人々は集まります。「モノ」とは単に物質的な物だけではなく、油津地区及び日南市周辺の地場産業である林業や水産業を中心とした生活文化そのものです。ここに提案する「ガーデンモール」は、創業支援施設、フードコート、商店、アートギャラリー、市民と観光客が交流するワークショップなどを内包し、商店街に変わる新たな生活・観光の拠点となることを目標としています。同時に、地元の産業を基礎にしたイノベーションや市民活動の活性化を促し、それらを体現し、学び、教育する創造的な都市機能を形成します。



□配置図 縮尺：1/400

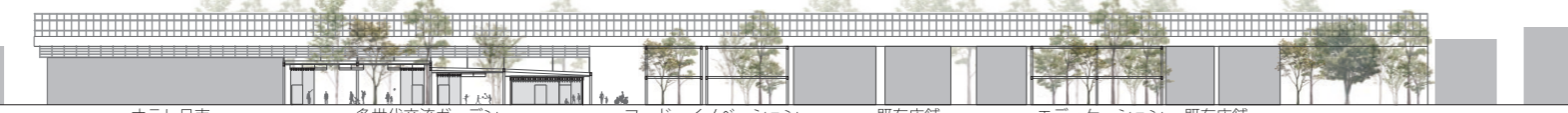


- 1. フリースペース YOTTEN
- 2. 情報発信ブース
- 3. イベントホール(カーブ館)
- 4. あぶらつ塾
- 5. 多目的スタジオ
- 6. 鉄肥杉屋台
- 7. 鉄肥杉小屋
- 8. 倉庫
- 9. トイレ

A. 屋外スクリーン B. 交流プラザ

□二階平面図 縮尺：1/200

□断面図 縮尺：1/400



交流プラザをのぞく